



^13  
4014

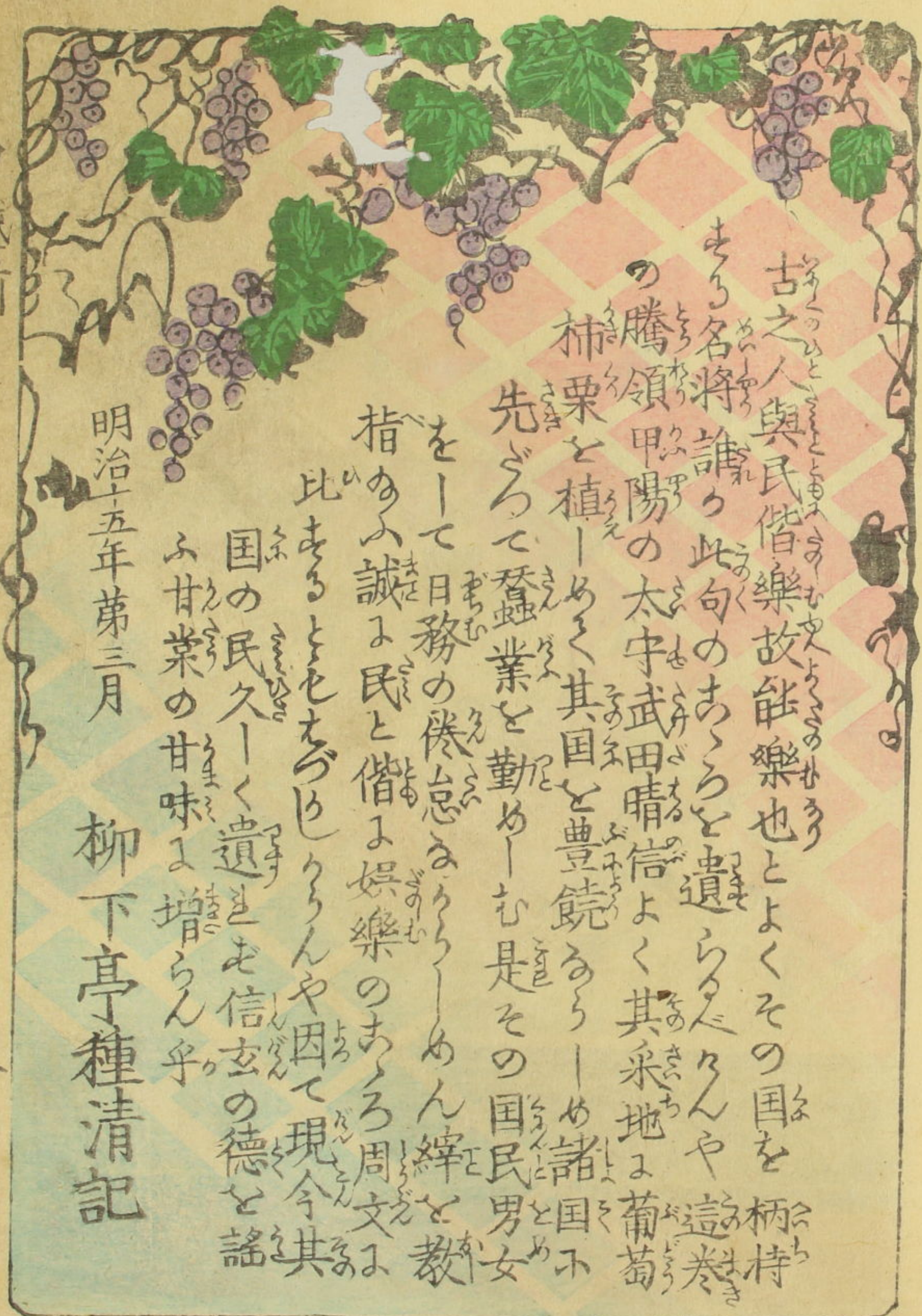


門へ13  
 號4014  
 卷



絵本甲越軍記

(未)



古之人與民偕樂故能樂也とよくその国を柄持  
 まる名將誰れ此句のあつるを遺らんとらんや  
 の騰領甲陽の太守武田晴信よく其采地は葡萄  
 柿栗と植しめく其国を豊饒ありしめ諸国不  
 先づらて蠶業を勤めしむはその国民男女  
 をして日務の倦怠なきらんや因て現今其  
 指の誠し民と偕し娛樂のあつる周文の  
 比まるとををらじらんや因て現今其  
 国の民久しく遺るを信玄の徳を謠  
 ふ甘菜の甘味は増らん乎

明治十五年第三月

柳下亭種清記



生田芳春筆





武田勝千代

武田勝千代  
 千代の  
 軍法と  
 且つありやと  
 千代の  
 去勢一  
 此とこれ  
 早く

繪本甲越軍記

前編上の巻

甲越二  
 大務  
 及信玄  
 武田  
 虎と  
 虎と  
 虎と



たりの  
 下外れて  
 虎が  
 虎が  
 虎が  
 虎が  
 虎が



廢之助  
 小幡道平  
 山本勘助  
 小幡道平  
 山本勘助  
 小幡道平  
 山本勘助

小幡道平  
 山本勘助  
 小幡道平  
 山本勘助



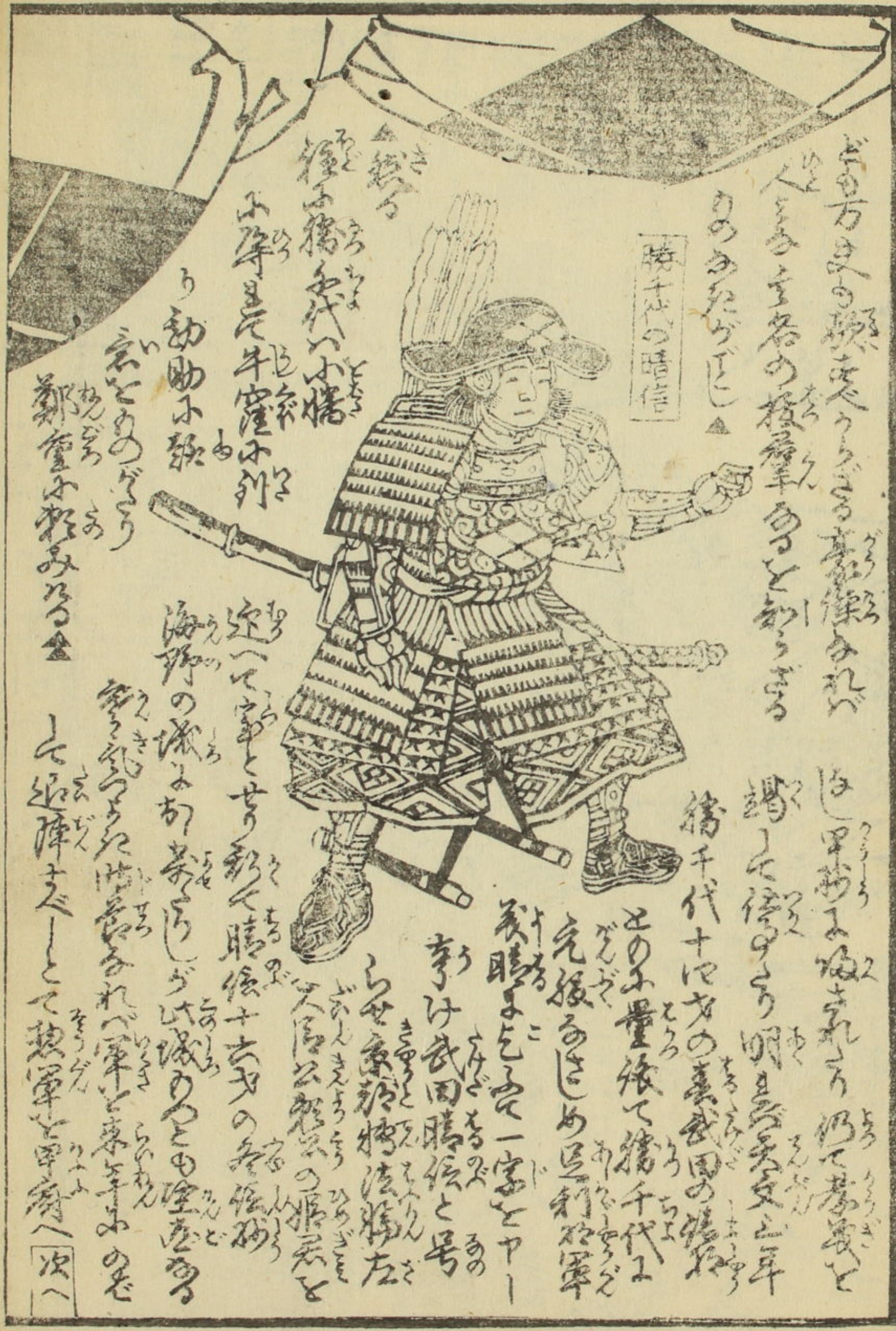
山本勘助  
 山本勘助  
 山本勘助  
 山本勘助

山本勘助  
 山本勘助  
 山本勘助  
 山本勘助

武田晴信初陣  
武田晴信初陣  
武田晴信初陣  
武田晴信初陣



武田晴信初陣  
武田晴信初陣  
武田晴信初陣  
武田晴信初陣



武田晴信初陣  
武田晴信初陣  
武田晴信初陣  
武田晴信初陣



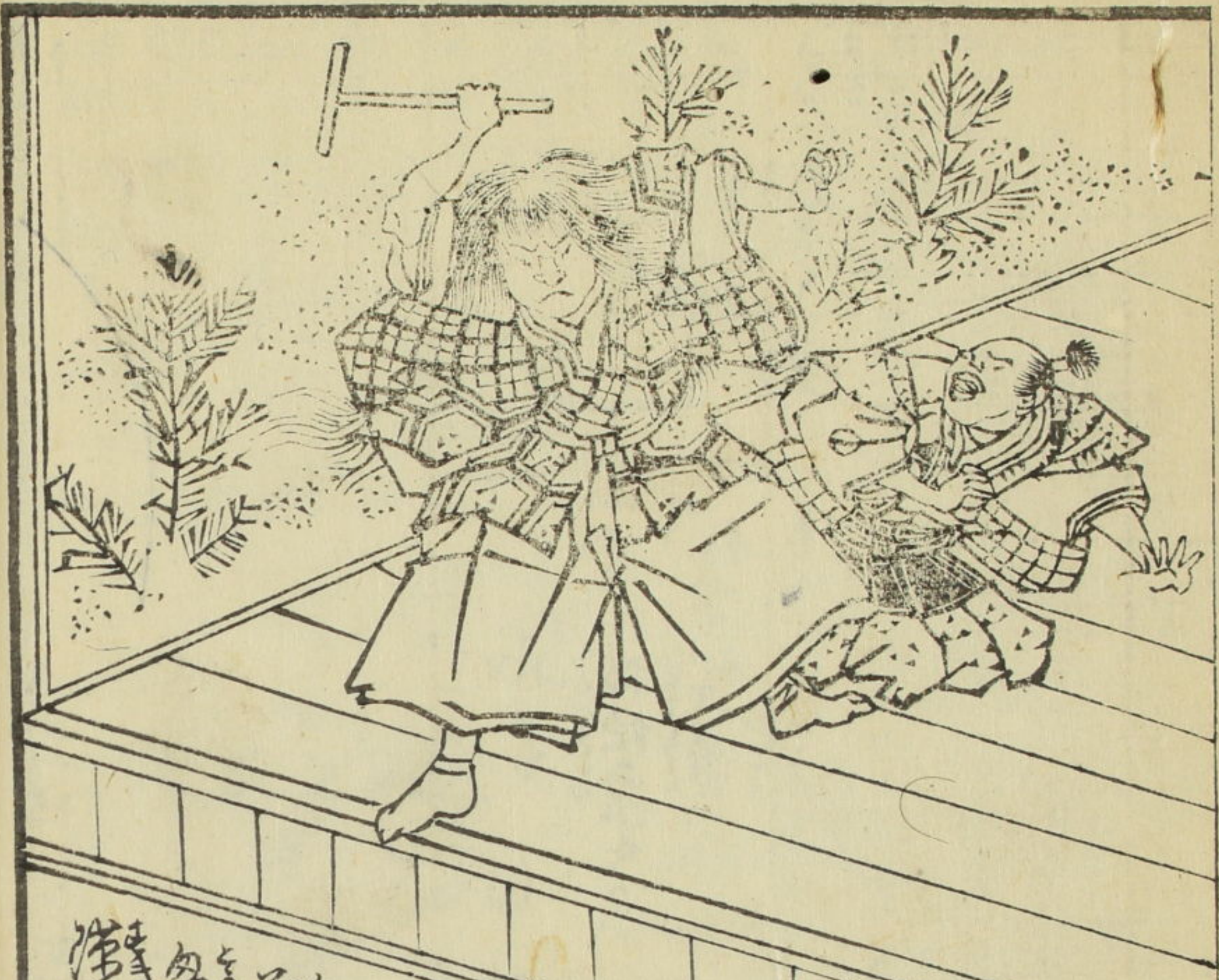
きつ  
 影の海船と  
 三番もて歌と  
 徳つと初打  
 と仕りけ城主

暗信塩川と  
 渡りて  
 小笠原と  
 撃

ひらりむき  
 半波もあ  
 入るは船と  
 対する  
 十た初  
 障のま柄  
 ありは  
 信虎親の親  
 言仁意まぐ二男  
 たまふ幼信茶三郎先  
 と家督よせんとの心  
 香らふに晴信を察  
 正んくを弟と交えんじ

穴山  
 其利小田  
 浪高板垣あひまふ  
 信つて蜂屋の好親  
 ちわれは信虎との今川  
 義元が行へ追せらる  
 を是れおなれ是る  
 信は信とてめを武  
 田家十九代の家

孝の飛と科際して  
 七初晴信  
 年十八と  
 為小信砂小  
 合伴して今晴信が  
 父と追出さる不  
 大



武田家の家主謀々  
諷訪頼茂とらう

五月廿二日  
 武田家主謀々  
 諷訪頼茂とらう  
 五月廿二日  
 武田家主謀々  
 諷訪頼茂とらう

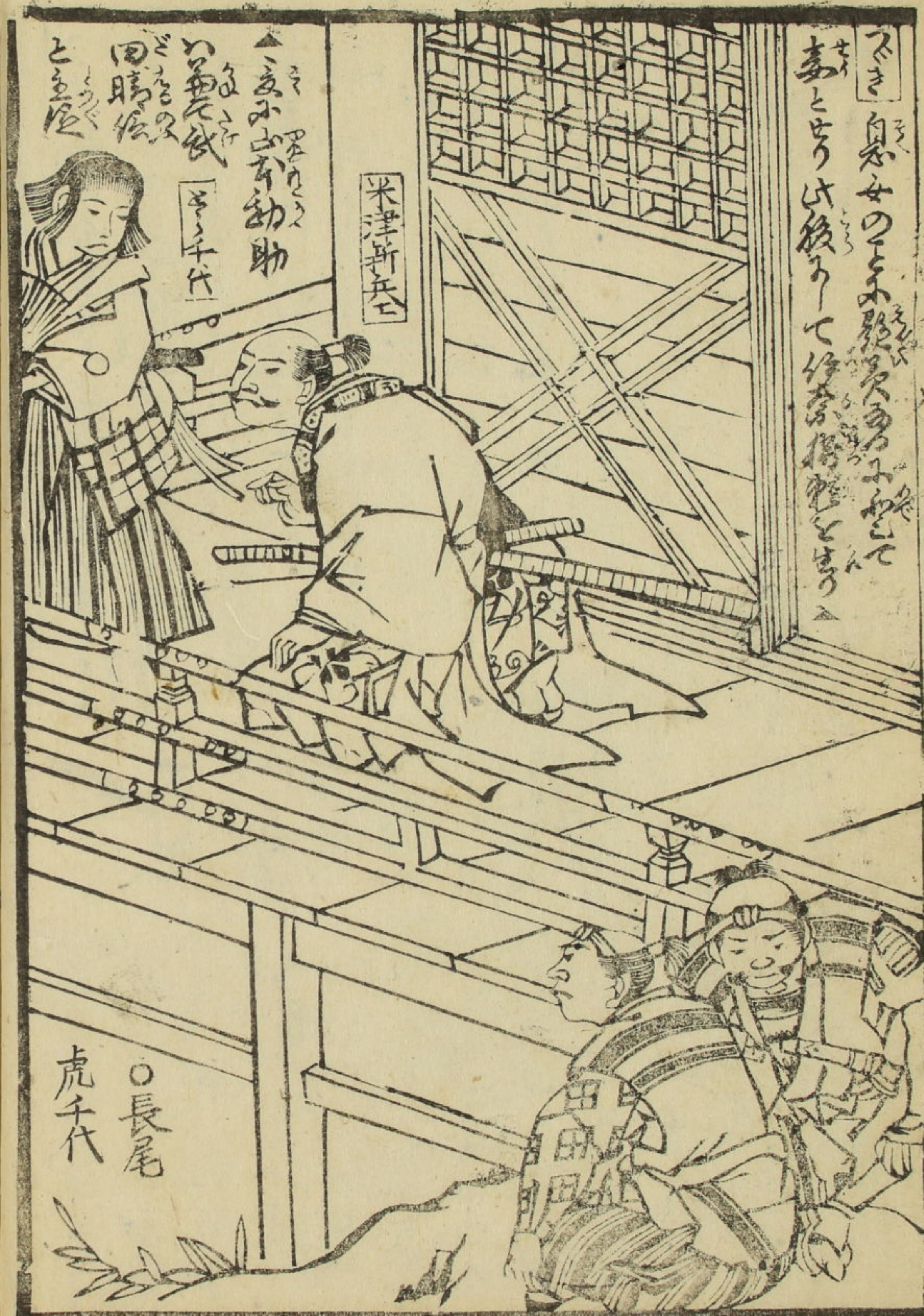
五月廿二日  
 武田家主謀々  
 諷訪頼茂とらう  
 五月廿二日  
 武田家主謀々  
 諷訪頼茂とらう



五月廿二日  
 武田家主謀々  
 諷訪頼茂とらう  
 五月廿二日  
 武田家主謀々  
 諷訪頼茂とらう



なき息女の上を脱ぎ去るふゆて  
妻と片は後りて仔細様をまう



米津新兵衛

まふ山平助助

の巻衣 一丁千代

田嶋伝

とる屋

○長尾  
虎千代

の盛約とる

関東の山平助

羽の結核の別後渡邊と

侍と武蔵守と愛

て巡歴するうち別て

小栗家の松田今川

の巻衣と威後せり遊よの身と

甲冑もあて武田時信の信とあり

初て又助助入の谷と上無福の地

より初む道主の田澤に忠孝隆なり

城後のちち上杉澤に城平権亮入る

候に相成天皇よりおて村屋を常良

の末宗あり良宗天世の孫を常良

父為景の不

奥と蒙て

下越後小

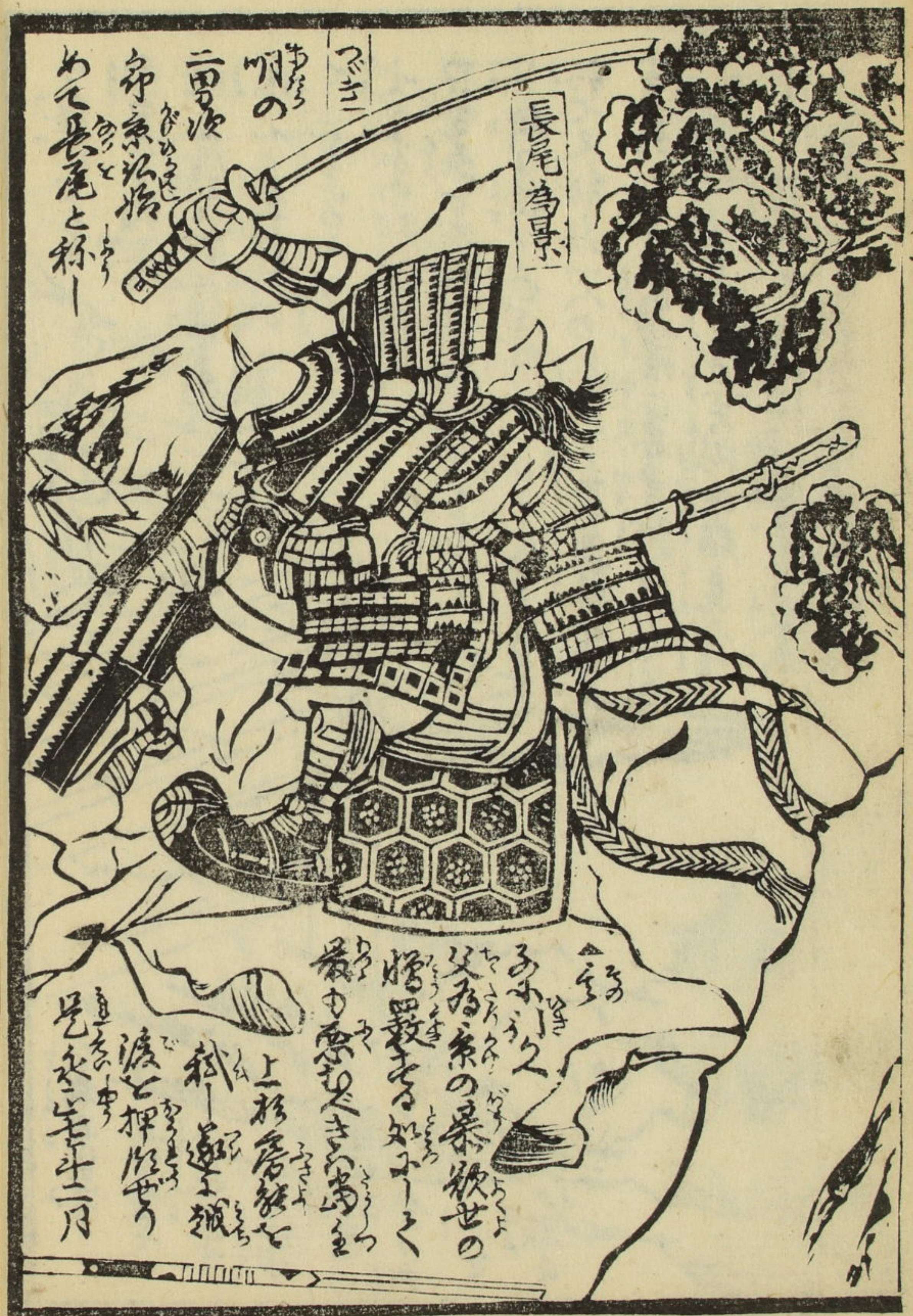
到る途中

米山寺小

登り大

志と

頭と



長尾為景  
 二重次  
 常宗次郎  
 めて長尾と稱し

父常宗の暴族世の  
 婿最良を如く  
 最中常宗の嫡子  
 上杉房経を  
 討つて上杉  
 波と押し退けり  
 是永正十一年



そとよりお供して  
 長尾常宗の常  
 とを揮つてあちと  
 せつて虎をぬい糸  
 虎と名のつたお政虎と  
 の初名は虎千代といふ  
 仁義明の天狗といふ  
 ちやうきとて天下  
 名奴といひつべし

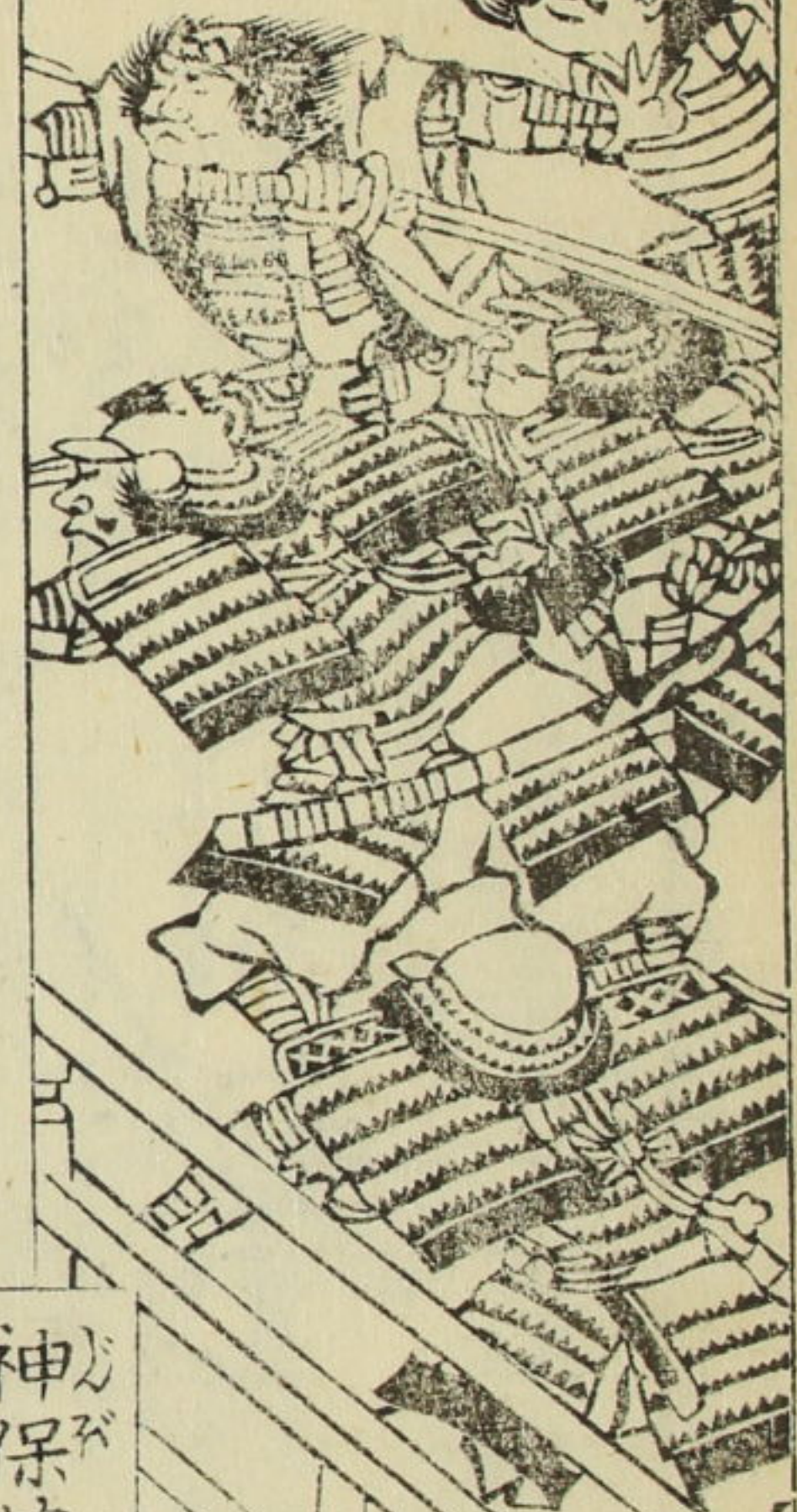
△初て上杉小  
 治正杉の法  
 長尾常宗が  
 運巻と  
 △勝つて上杉小  
 治正杉の法  
 長尾常宗が  
 運巻と  
 △勝つて上杉小  
 治正杉の法  
 長尾常宗が  
 運巻と

為景の猛勇よく  
 千且野の陥虜と  
 跳り出るの因

日成前

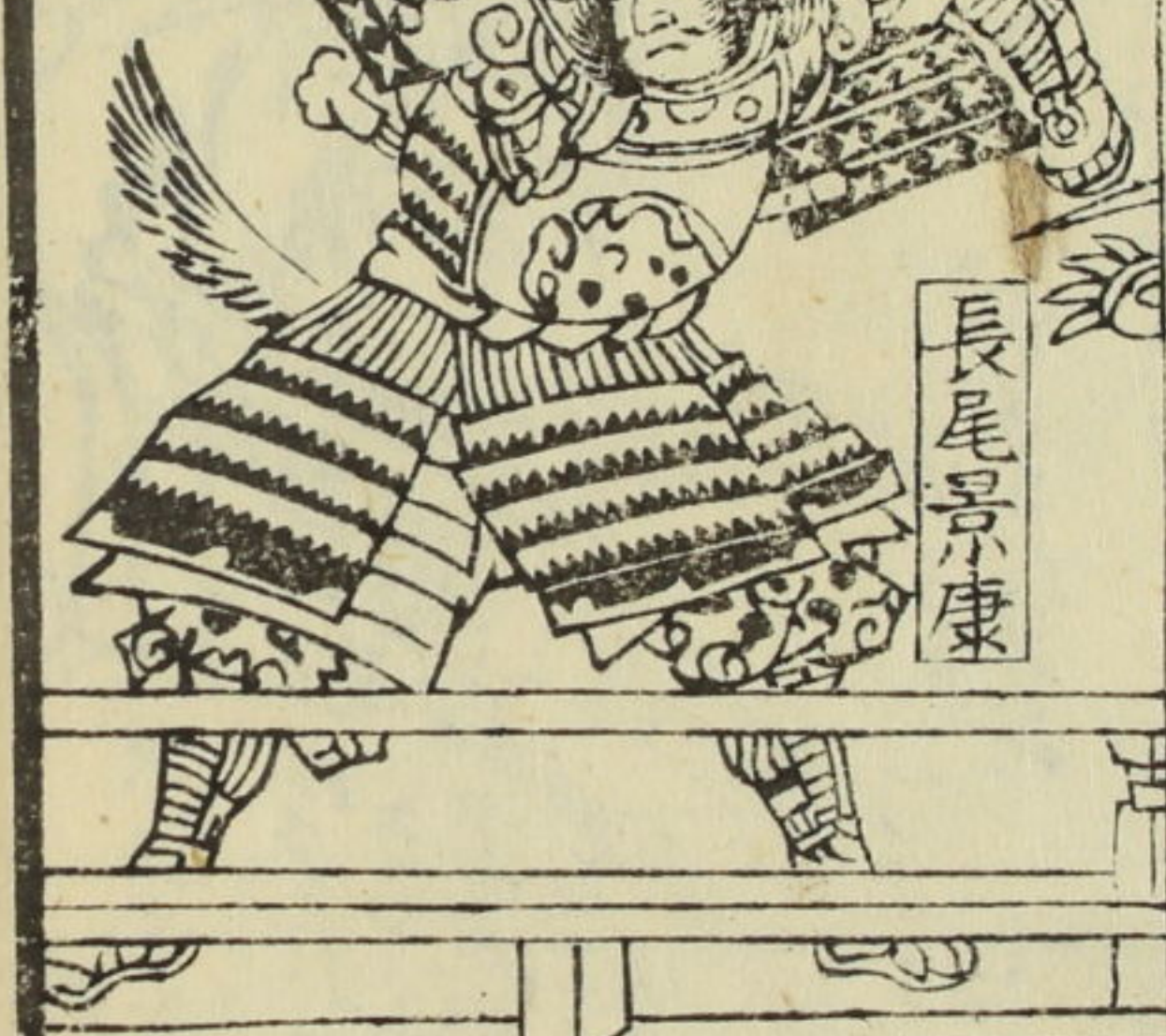
乙

つぎ  
賣運回  
矢の利運  
と竹槍傷見分と  
味方としてと移



神保等府内の城を  
襲撃して景康景  
房を殺す

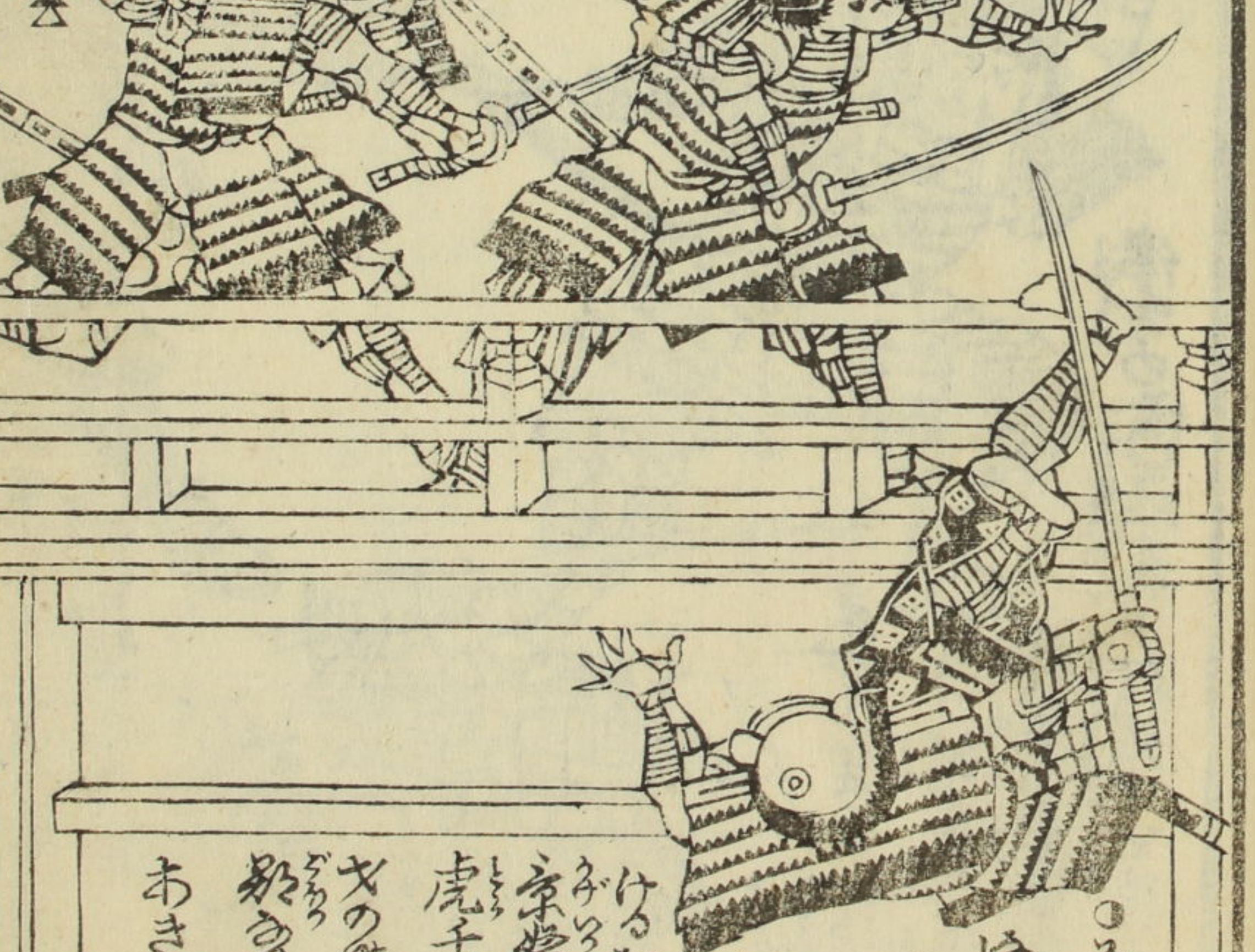
▲龍定とらち田  
く定憲とらち  
軍威をもち宏太  
かぶたつとらち  
友小の作美後河  
ちの拓海の城ありて  
抗敵しれが為京つを



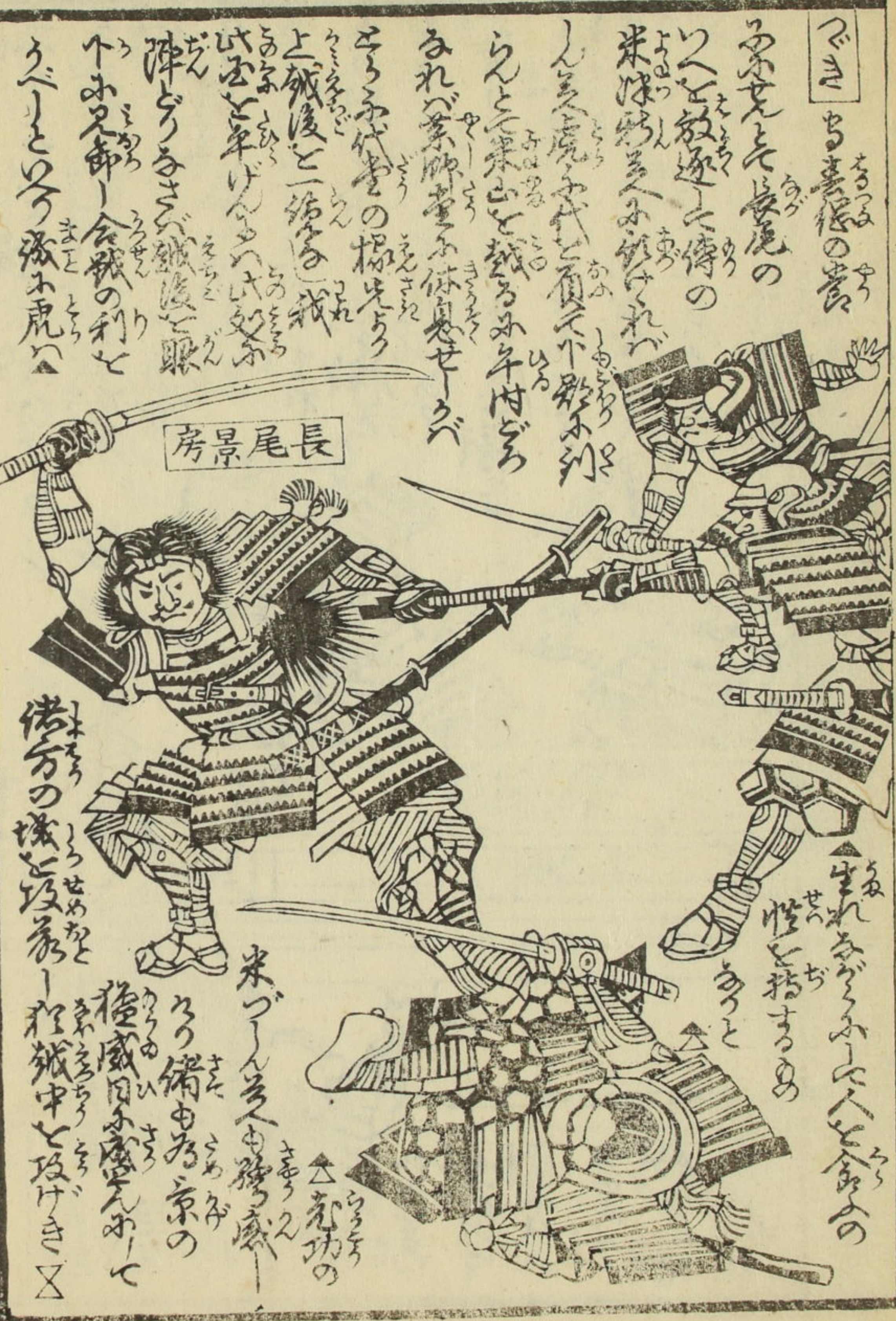
長尾景康

△てある  
され中  
お家を  
遠

攻るといふも世とも懐むけり  
あつたあ後修と杉憲房  
杉はてらさきとこが木乃  
多柳と長尾景康  
ろく二年正月廿月の生れ  
あり別とふと杉本柳と  
どろろの嘆人ともおあつ  
元あり奸倭の為家とを悟む  
正然敵のどくまはあつた  
東の系が虎が女とふり  
坂も父も後修とつて  
妻月あはれを返りお家  
とせんせりとも虎ちよの志



○るさ  
は父  
は孫  
ける  
景房つて  
虎千代八  
女の所  
お家の地  
おき



つまじきも善徳の書  
 米づんを長尾の  
 侍と敵討つ侍の  
 米づんは米づんが  
 んと米づんを討つ侍の  
 らんと米づんを討つ侍の  
 られ米づんを討つ侍の  
 上城後と一侍の  
 下小見師一合戦の利と  
 久しとつろ米づん

長尾景房  
 米づん  
 米づんは米づんが  
 んと米づんを討つ侍の  
 らんと米づんを討つ侍の  
 られ米づんを討つ侍の  
 上城後と一侍の  
 下小見師一合戦の利と  
 久しとつろ米づん



長尾晴景府内の  
 虎口と脱れ出る  
 と長尾晴景の  
 のみと長尾晴景の  
 生身の城と脱れ出る  
 且長尾晴景の  
 長尾晴景の  
 長尾晴景の

長尾晴景  
 虎口  
 と長尾晴景の  
 のみと長尾晴景の  
 生身の城と脱れ出る  
 且長尾晴景の  
 長尾晴景の  
 長尾晴景の





つき附がどしと暮の掃傍にづものも款みちのていぎの  
 暮餘あるると思つたり照田の影も掃傍に方してある  
 雨の影のつらみ友に米津老の影とのみ京虎  
 の影のあり密使と掃傍の伴へきり一欠の連  
 汽を授けて照田も細まるに相款の影も通る  
 べらむ別て照田のまがらう星下と煙草と云  
 外あり早く長尾の海境の巨一吹挙  
 また一と云送りなれば相款の二一おれり  
 忽ち一策と敵とて照田と下り照田は弟を打  
 ぎ殺すの骨を斬ると云怖  
 一これハ掃の掃と云く掃後也  
 それらと云よ掃尾の城ハ掃糸也  
 ○それハ掃き討肉の時也

景虎

宇佐美定行

暁と照田の影  
 其影を掃  
 又掃に  
 掃の  
 掃の

血と洗んとて掃と業  
 生ハ不道と云ふ  
 世ハ不道のてと云れ  
 ハ不道と云ふ

武蔵の掃のて酒も不ふける中  
 不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中

農夫  
 農夫

送るといふ  
 送るといふ  
 送るといふ  
 送るといふ  
 送るといふ  
 送るといふ  
 送るといふ  
 送るといふ  
 送るといふ

武蔵の掃のて酒も不ふける中  
 不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中  
 女の身も不ふける中

宇佐美定行

暁と照田の影  
 其影を掃  
 又掃に  
 掃の  
 掃の

血と洗んとて掃と業  
 生ハ不道と云ふ  
 世ハ不道のてと云れ  
 ハ不道と云ふ



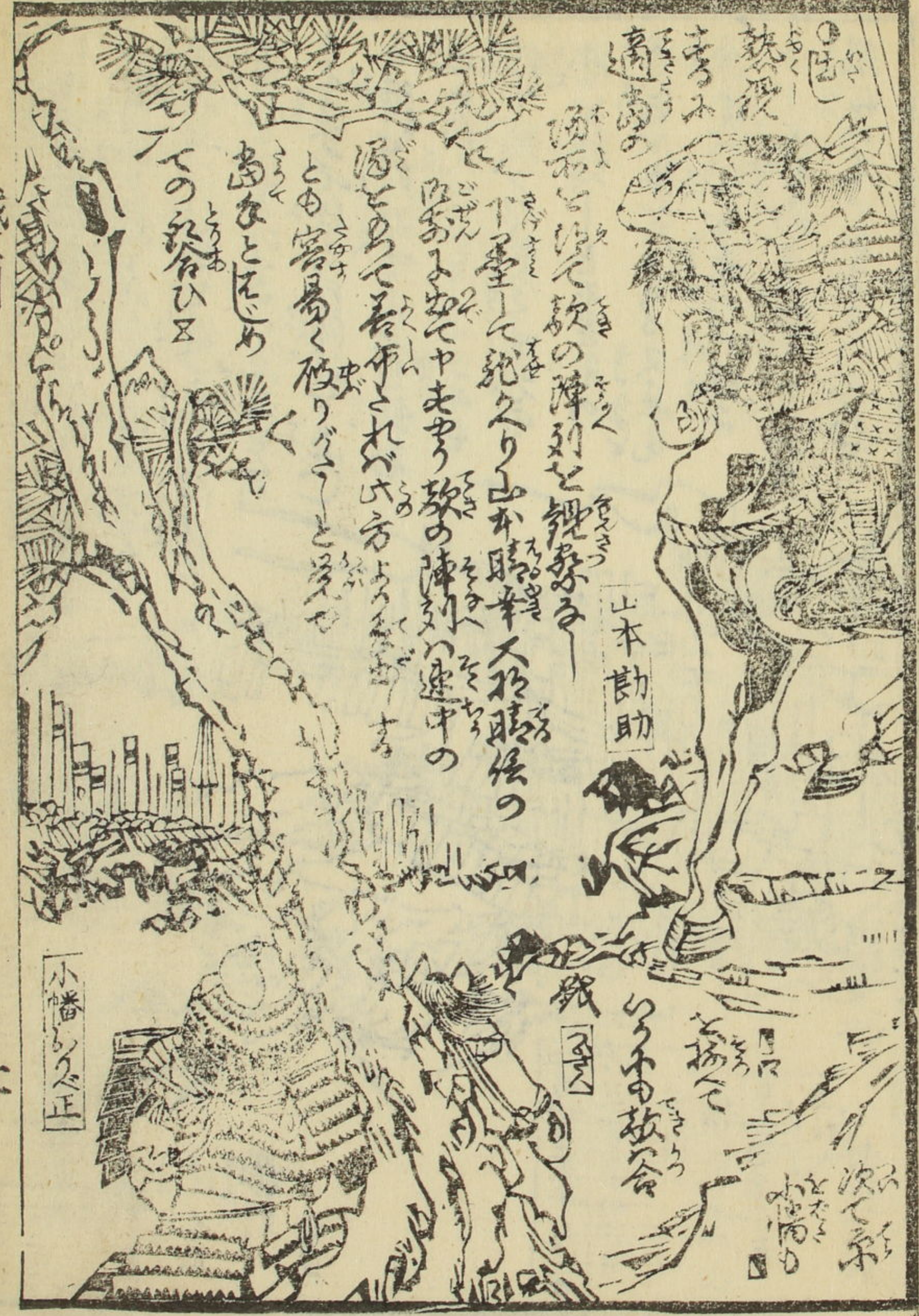




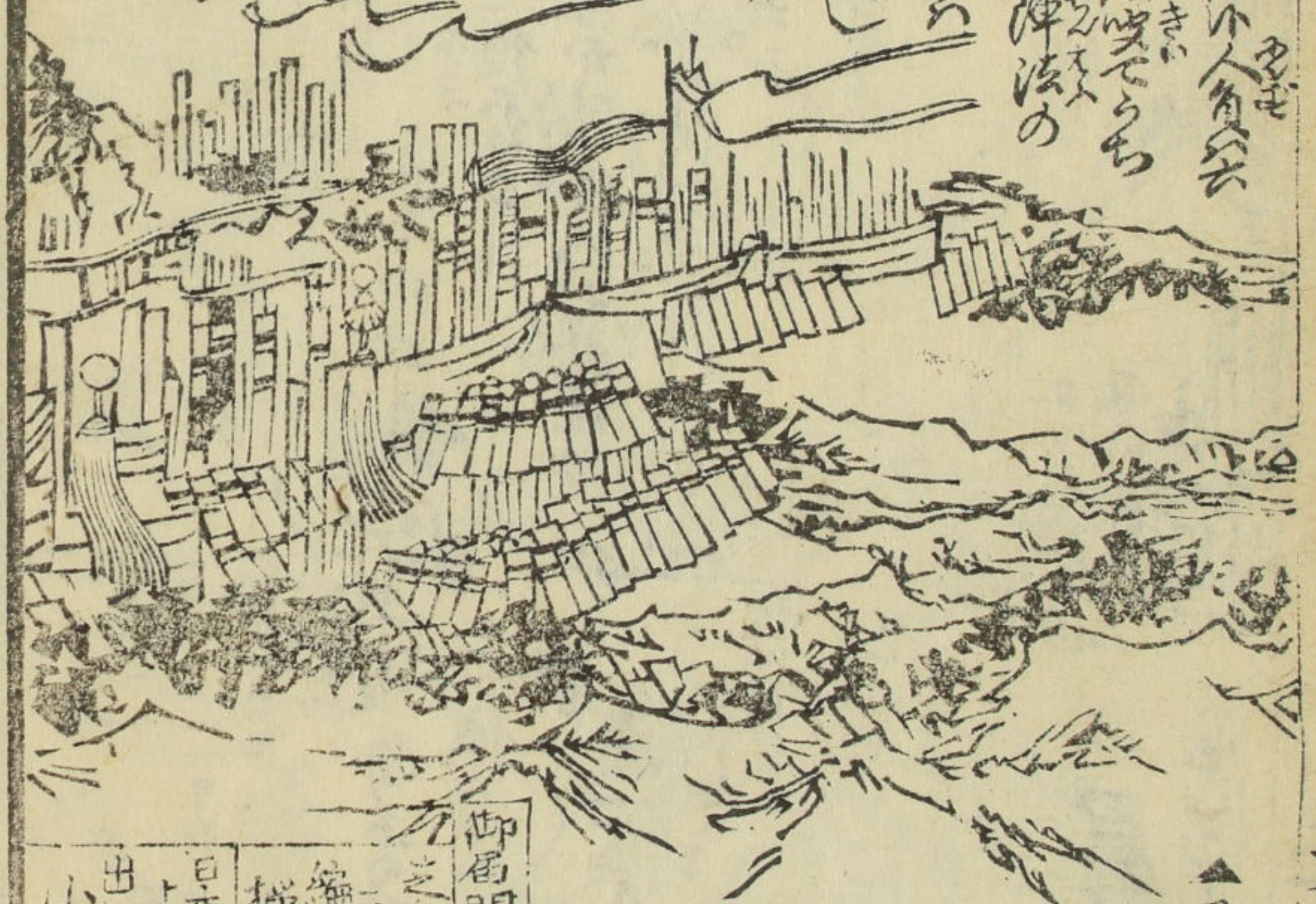








つぎ 巧て陣列募らんとは、又小人負ふ  
 手の内外と教下ありと、時信てらち  
 兵隊再び助助と、近く招た陣法の  
 見えと、さきいさきの南落とら  
 一と定め、築らひ、隊はと、  
 と陣と、務羽ま、定む、助助  
 卒さび、大おみ、を、て、五年を  
 結て、戦うら、必定、味方の  
 務と、決て、一と、を、定む、の  
 手、築と、は、たり、たる、又、長、尾  
 東、虎、の、隊、と、高、の、を、結、み  
 ち、一、大、お、み、を、ら、結、み、を、の、て  
 時、信、の、を、さ、を、ふ、ら、ち、合、せ



▲号北の  
 一戦と  
 逐人と  
 隊列  
 御届明治五年 月 日  
 編輯  
 櫻沢堂山  
 日本福通三頁  
 出板人  
 小林鉄次郎

